

## 「戦後 70 年談話」

2015 年 08 月 17 日

内外から大きな注目を集めた「戦後 70 年安倍首相談話」が出された。美しい言葉で整えられた談話を聞いて、正直驚いた。安倍首相の過去の言動からは、考えられないような談話で、いつ変身したのかと思った。安保法案が国会で審議されていく中で、憲法違反、また危険な法案であることが国民に分かってきて、多くの団体、あらゆる階層から反対の意思表示が出された。中国、韓国だけでなく欧米からも、安倍政権の右傾化が危惧されていた。八方塞がりの中で、国民と世界に納得してもらおうとして作られた苦肉の談話になったのではないか。「わが国は、いかなる紛争も、法の支配を尊重し、力の行使ではなく、平和的・外交的に解決すべきである。この原則を、これからも堅く守り、世界の国々にも働きかけてまいります」と言う。そうならば、自衛隊をいつでもどこでも、切れ目なく派遣する「安保法案」を出す必要はない。また「先の大戦への深い悔悟の念と共に、わが国は、そう誓いました。自由で民主的な国を造り上げ、法の支配を重んじ、ひたすら不戦の誓いを堅持してまいりました。70 年に及ぶ平和国家としての歩みに、私たちは静かな誇りを抱きながら、この不動の方針を、これからも貫いてまいります」と言う。そうならば、「戦後レジームからの脱却」などと言わなくてもいいではないか。

安倍談話は、福島原発事故処理を「アンダーコントロール」と言ったのと同じ、欺瞞がある。村山談話で語られた 4 つのキーワード「侵略、植民地支配、おわび、反省」が入るかどうかということに関心が集まっていた。全ての言葉が入っていた。しかし、それらの言葉の主語と目的語が不明瞭である。歴史を通史する第三者的な見方で語っている。言葉は誰が、誰に、いつ、どこで、何を、どうしたかを明示する時、生きた言葉となる。それらがない場合、責任の主体をなくし、流される言葉となる。アジア・太平洋戦争に関する言葉は少なく、日本の朝鮮人の強制連行、言葉・文化まで奪った植民地支配、中国での燃やし尽くし、奪い尽くし、殺し尽くす「三光作戦」は語られてなく、アジア諸国に行った侵略はぼかされている。それ以前の西洋諸国の植民地獲得戦争に巻き込まれ、日本は植民地支配のもとにあったアジア、アフリカ諸国に勇気を与えたと自賛している。典型的な例が下記の言葉である。「私たちは、20 世紀において、戦時下、多くの女性たちの尊厳や名誉が深く傷つられた過去を、この胸に刻み続けます。だからこそ、わが国は、そうした女性たちの心に、常に寄り添う国でありたい。21 世紀こそ、女性の人権が傷つけられることのない世紀とするため、世界をリードしてまいります。」日本が「従軍慰安婦」を生み出し、彼女たちの人生を奪ったことに対する言明と謝罪はない。

安倍談話は中国、韓国では、史実を曖昧に捉え、謝罪の不徹底さに不満はあるようだが、強い反発を受けていないようだ。要は、これからの日本は、安倍談話にきちっと主語と目的語を入れた責任ある対応で平和国家を造り、平和国家ならでの国際貢献をしていくことである。そのためには、安保法案を廃案にし、九条を守ることである。

「港南台九条の会」はメンバーたちが短い言葉で「庶民の談話」を出し、15 日、港南台駅前前で配布した。ちなみに、私の談話は下記の通りである。「子どもの頃。悲惨な沖縄戦や広島、長崎の原爆映画を観て、日本は被害を受けたのだと思っていた。青年期に、アジア・太平洋戦争の実態から、アジア諸国を侵略、支配した加害国であったことを知らされ、憲法九条は「謝罪」を含んでいると納得した。謝罪が和解、共生を生み出す。九条は平和を実現する何よりの力である。」